

アマミー島とネリヤカナヤ

宇検村立久志中学校 一年 野上田 一兵

むかしむかし、南の海にぽっかりと浮かぶ小さな島がありました。島の名前はアマミー島。ケムムンという王様がいる、のどかな島でした。王様にとって、アマミー島は自慢の島でした。特にアマミー島を囲む海には誇りを持っていました。深い海の底まで見える海は、青いガラスを張ったように澄んでいて、穏やかでした。海の中には、赤や黄色、緑のスクーフが揺れるように泳ぐ熱帯魚たちがたくさんいました。「アマミー島の海は世界一」は、ケムムン王の口癖であり、アマミー島の住民たちにとっても同じでした。

ある日、ケムムン王は一番信頼している家来のイボ・イモコを呼び出しました。

「アマミー島の自慢の海をもっと世の中に広めたい。ちよっと町に行って人々の声を聞いてきてくれ。」

イモコが町に出ると、こんな声が聞こえてきました。

「アマミー島の海は世界一よね。でもそれは、この島の海底にあるネリヤカナヤのおかげだと聞いたわ。」

「私も聞いたことがある。ネリヤカナヤから送り込まれる、きれいな空気と海水のおかげで、アマミー島の海も

きれいなんでしょう。」

イモコは、お城に帰ってさつそくケムムン王に伝えました。すると、

「それでは、まるでネリヤカナヤのおかげで、アマミー島があるみたいじゃないか。けしからん。アマミー島が世界一なんだぞ。」

と激怒し、すっかり不機嫌になってしまいました。しばらく考え込んでから、ケムムン王はイモコに言いました。「お前、ネリヤカナヤに行つてこい。そして王に、アマミー島の支配下に入るように言うんだ。そうすればアマミー島が世界一だ。」

アマミー島の海底のもっとも深いところにある、ネリヤカナヤに行くには、ちよっと大変です。まず、酸素をたくさん閉じ込めたアメを口に含みます。ゴーヤよりもずっと苦いこのアメを、しばらく口に含むには、大人でもつらいのですが、しばらくの辛抱です。次に、マグロタクシーをつかまえます。マグロタクシーはどんなに深い海の底も、どんなに遠い海までも、あつという間に着くので人気です。ただ、どんなときもロケットより速いスピードで泳いでいるので、声をかけるだけでも大変です。やつと準備ができると、イモコはネリヤカナヤへ向かいました。

ネリヤカナヤは思っていた以上に、すばらしいところ

でした。赤やピンクのイソギンチャクが手を振って歓迎してくれ、真っ白なウエディングドレスを着た花嫁さんのようなクラゲたちがくるくると踊っています。アジやイワシの群れが作った大きな渦は、光のトンネルのようで、その中をタコやイカたちが上へ下へと行ったり来たりしています。ネリヤカナヤは「楽園」という言葉がびったりの場所でした。金色のサンゴに囲まれた大きなお城に、王様がいることはすぐにわかりました。

二匹のウミガメに案内され、イモコはお城の中に入りました。広い王室の真ん中に座っている王様がネリヤカナヤの王様でした。

「よく来てくれましたね。私はネリヤカナヤの王のヤナカヤです。せっかく来てくれたのです。楽しんでいってくださいね。」

ヤナカヤ王は、明るい笑顔と優しい声でイモコを安心させてくれました。すっかり気を許したイモコは、ケムムン王の命令も忘れて、おいしい料理とお酒、熱帯魚たちのダンスを一晚中、楽しみました。夜が明けて、ヤナカヤ王がふと口を開きました。

「そういえば、イモコさんはなぜ、ネリヤカナヤに来られたのですか。」

その一言で、イモコはすべてを思い出し、「そうでした。私はケムムン王から命令を受けて来たの

です。ケムムン王は、ネリヤカナヤをアマミー島の支配下に置きたいとおっしゃっています。お受けください。」

イモコの言葉に、ヤナカヤ王は戸惑い、困った顔をしました。しばらくして、小さなカゴを取り出しました。「支配されるというのは無理です。でも、友好関係を結ぶならいいですよ。これは、その証です。お受け取りください。」

イモコが受け取ったカゴには、ウミヘビと黒いカメが一匹ずついました。

「そのウミヘビと黒いカメが、きつとあなたたちに幸福をもたらすことでしょう。」

ヤナカヤ王の言葉を聞き、イモコはアマミー島に帰っていきました。

イモコは、ケムムン王にネリヤカナヤのことをすべて話しました。楽園のような場所であることや美味しい料理やお酒でもてなしてもらったことなど、話し始めると止まりませんでした。最後に、友好関係を結ぶならいいと言われたことを話し、証である小さなカゴを差し出しました。ケムムン王は受け取るや否や、カゴを床にたたきつけました。

「何が友好関係だ。馬鹿にして。アマミー島が一番で、ネリヤカナヤを二番目にするというのが気に入くないのか。許せん。」

大きな声で怒り狂う王様のそばで、たたきつけられた拍子に、カゴから出てきたウミヘビと黒いカメがびくびくしています。いらいらがおさまらない王様が、ウミヘビとカメに八つ当たりをしようとしたその時です。ウミヘビが王様の足をガブリ。

「ぎゃあ。痛い、痛い。」

王様のふくらはぎは、ラグビーボールのようにふくれあがっています。あつという間に王室は大騒ぎになりました。その隙に、ウミヘビと黒いカメはそそくさと逃げていきました。

ケムムン王は、そのまま熱を出して、一か月ほど寝込んでしまいました。熱が下がったケムムン王は、イモコを呼び出しました。

「イモコ、私は間違っていたかな。一か月間ベッドの中で考えていたのだ。ひどいことをしようとしたから罰が当たったのだろうと。」

イモコは柔らかい笑顔を浮かべて言いました。

「元気になったら、一緒にネリヤカナヤに行きましょう。ヤナカヤ王もきつと歓迎してくださいませよ。」

その言葉にケムムン王もにっこり笑いました。

元気になったケムムン王とイモコがネリヤカナヤを訪れたことで、アマミー島とネリヤカナヤは晴れて友好関係を結ぶことになりました。アマミー島の自慢の海も、

これまでに以上にキラキラと輝いて見えます。

そういえば、大騒ぎの時にこっそり逃げたウミヘビと黒いカメですが、アマミー島で生活しているうちに、すっかりこの島を気に入ったようです。ウミヘビはいつのまにかハブと呼ばれるようになりました。甲羅がいらなくなつて、生活するようになったカメは、いつのまにかクロウサギとなつたとか……。こうして、二匹はアマミー島とネリヤカナヤの友好のシンボルとなり、大事にされましたとさ。